



農村生活のすすめ

第12回：「働き方」についてのコラム

主席研究員 川井 真

1. 労働と自由

アウシュビッツ強制収容所の門には“Arbeit macht frei”（労働は自由をつくりだす）すなわち「働けば自由になる」という言葉が刻まれている。この場所で繰り広げられた凄惨な現実を知るならば、なんとも欺瞞に満ちたメッセージではないか。しかしここで着目したいのは、“自由”を“労働”の対比概念として用いた、その深意である。なぜなら労働という「苦勞と困難」を耐え忍べば、その先には自由という「喜びと楽しみ」が待っている、というメッセージがこの文脈から伝わってくるからである。なるほど労働の先に自由があるというキャッチフレーズは、悲しいかな現代社会を生きる多くの日本人にも違和感なく受け入れられるのかもしれない。経済合理性と等価交換のルールに従って、賃金を得るための活動のみを労働とするならば、たしかに労働はそれ以上の意味をもたない。したがって所得に直結しない仕事もまた、労働とは認められない。その果てに、誰もが最少の労働と最少の努力で、最大の利益を求めるようになる。このような労働観は危険である。あくまでも主観的なものであるのだが、努力と成果の相関が崩れたとき、労働に対する強いマイナス・イメージが喚起され、労働からの逃避がはじまる。そこには労働に対する主体性の喪失がある。

2. 追憶

わたしが人生の前半を過ごした横浜の実家では、年末が近づくと、懇意にしていた近所

の植木職人に庭木の手入れをお願いするのが年中行事の一つになっていた。幼いころ（たしか小学2年生か3年生の頃だったと思うが）、年の瀬も押し迫った小春日和の穏やかな昼下がり、祖母と二人で縁側に腰掛けて馴染みの植木職人の仕事を眺めていた。そこで祖母と交わしたなにげない対話が、ときおり思い起こされる。

祖母がなんともうれしそうなので「おばあちゃん、なんでニコニコしているの？」と尋ねると、祖母は「ほら見てごらん、植木屋さんが楽しそうに仕事をしているよ、ありがたいねえ、おかげで楽をさせてもらっているよ」と、まるで独り言のようにつぶやいた。その返答に困ったわたしが、すこし間をおいて「そうなのか、おばあちゃんは植木屋さんに楽をさせてもらっているんだね」と応えると、祖母は続けて「“働く”という言葉には“ハタ”を“ラク”にするという意味が込められているんだよ」、「マー坊（祖母にはそう呼ばれていた）も大人になったらみんなを“楽”にしてあげるために仕事をするんだ」、「そのためにたくさんのことを学ばなければいけない」と、幼いわたしにも理解できるように、笑顔の理由を教えてくれた。

ふだんは意識の深層に眠っている大切な記憶が、なにかのタイミングで鮮明によみがえってくることがある。当時のわたしには祖母の深意を理解することはできなかったが、祖母が他界したあと、祖母との思い出をたどるなかでよみがえってきた記憶が、わたしのアイデンティティ形成に影響をあたえている。

それは身体化された記憶といってもいい。まさに死者との対話なのかもしれないが、このときあらためて、祖母はわたしのなかで、正確にはわたしの自我の形成過程において、“意味のある他者”となった。なるほど仕事とは本来「人間的な」活動であり、働くことの本質は他者のためにある。そして「働き方」は、その時代の生活様式に組み込まれている。したがって他者の存在なくして働くことの意味が見出せないのは、ある意味で当然のことなのであろう。

3. 共同体感覚

自己利益追求という動機を内包した市場の論理の蔓延が“文化の危機”をもたらしていると感じたフランスの社会学者ピエール・ブルデューは、「人間であること、それは文化を身につけることである」と語り、「文化資本」なるものを想定した。なかでも集団に固有の生活様式のようなもの、すなわち個人とその個人が所属する集団の内部に蓄積され、身体化された、感覚や価値認識や慣習などに着目し、それを「ハビトゥス」と名付けた。そして資本主義と対比させたのである。現代の労働現場に漂う閉塞感の背景にあるのは、このような文化の喪失なのかもしれない。「働き方」もまた、社会の内部に深く埋め込まれた文化なのである。

今年の夏、長野県において「信州エクスターンシップ」という地域滞在型インターンシップが実施された（本誌10～15頁に掲載）。この企画は——広く一般に理解されている——通常のインターンシップとは異なり、就業経験よりも異文化体験に重きを置いたプログラムになっている。働くことの本質を問いなおすことで職業選択の可能性が広がり、とりわ

け農村社会という異文化に身を投じることで、豊かな労働観を育むきっかけになるのではないかと、秘かに期待していたのである。最終日、学生たちの成果発表を聞いて安心した。労働のもつ社会性や人間的な関係性に、あるいは自然とのかかわりの中に、働くことの意味を感じ取っている学生が多数を占めたからである。

学生たちに芽生えたのは、まさに「共同体感覚」ではなかったか。この感覚こそが、ネクスト・ソサエティへの移行すなわち「未来社会の変革」にとっての、重要なトリガーになっていくのかもしれない。

【参考文献】

- ・ピエール・ブルデュー著 原山哲訳（1993）『資本主義のハビトゥス：アルジェリアの矛盾』藤原書店
- ・ジョージ・ハーバート・ミード著 船津衛、徳川直人編訳（1991）『社会的自我』恒星社厚生閣
- ・大内秀明（2012）『ウィリアム・モリスのマルクス主義：アーツ&クラフツ運動を支えた思想』平凡社（平凡社新書）
- ・カール・ポラニー著 野口建彦・栖原学訳（2009）『[新訳] 大転換：市場社会の形成と崩壊』東洋経済新報社
- ・ラスキン著 飯塚一郎・木村正身訳（2008）『この最後の者にも・ごまとゆり』中央公論新社
- ・チャールズ・テイラー著 上野成利訳（2011）『近代：想像された社会の系譜』岩波書店
- ・ソースティン・ヴェブレング著 高哲男訳（2015）『有閑階級の理論 増補新訂版』講談社